

# 平成の変革期にあたって



所長 水元 弘二

今年の12月に工業技術センターは創立15年目の節目を迎えます。15年を振り返ってみますと、高度成長下の比較的恵まれた財政環境からスタート。そして新世紀を迎えた今日、バブルのツケが景気回復に大きく影響を与え、同時に研究環境も厳しくなってきました。

国では、昨年度から、行政・財政改革に着手し、行政では省庁の統廃合、国研の独立法人化等、財政面では、国債発行を30兆円に抑える等、大がかりな改革がなされてきました。

本県におきましても、財政改革プログラムがスタートし、今年度予算づくりは、このプログラムに沿った方式で査定されました。その結果46年ぶりの減額予算（当初予算）となりました。

このような研究環境の中で、研究開発事業・技術支援事業の実用化・効率化を如何に図るかが、各研究員の知恵の出し比べになると考えています。

ところで、今年の元旦の朝、NHKTVをご覧になった方もあろうかと思いますが、世界遺産に指定された岐阜県の白川郷で「心をつないだ大屋根ふき」という番組がありました。白川郷には「ゆい（結）」という人々の結びつきが今も受け継がれており、合掌造りでは屋根の茅を葺き替えるのも「ゆい」によって行われています。

最近、白川村では、郷里に戻って生活している30代男性が増えているそうです。彼らは「合掌造りの伝統技術」を守る「ゆいの仲間」に参加して屋根の葺き替えを行っており、さらに「世界遺産」保護を目的に、東京からも100名近いボランティアの人々が「ゆい」の仲間入りをして屋根の葺き替えに参加したそうです。私は、今もなお、助け合いの精神が残っていることに改めて感激しました。

冠婚葬祭や農作業等は、一昔前は、自宅で近所の人たちが協力し合って行うものでした。今日では商業化や機械化され、冠婚葬祭は結婚式場、ホテルや葬儀場で行われ、農作業は機械化され、「助け合いの心」が薄れてきています。と同時に「ゆい」の言葉も失せてきています。

これから先、不明な時代を乗り切っていくには、

センター全体が一体となり「ゆいの心」で研究開発や技術支援に取り組んでまいりたいと思っています。

前置きはさておき、今年度の当工技センターの目標とする主な機能強化と役割を以下紹介します。

(1) 研究開発事業は、

これまでに培ってきた基盤技術や特許取得・出願した技術の実用化・応用化に向けた研究に取り組みます。また、シラス・木竹等の地域資源の高度利用、薄膜・表面処理の技術やノイズ対策等の技術を活かした研究に取り組みます。

県内の農業・林業・水産等の一次産業の工業化に、画像処理・省力化・研削・切削や微生物の改質等の技術を活用する研究に取り組みます。

(2) 研究体制は、重点テーマをプロジェクト化して産学官連携、そして地元企業のニーズは地元企業との共同研究として取り組み、国庫補助等の提案公募型研究事業に積極的にチャレンジします。

(3) 技術支援体制の強化を図るために、「出前技術支援」による現地指導の実施や企業ニーズ（知恵）の発掘を積極的に取り組みます。

(4) 工技センターの開放・公開については、成果発表会、講習会等の開催、研究報告・年報等の発刊とインターネットを利用した「技術情報配信サービスKIT-enews」を配信します。

また、所内に知的所有権センターが設置されています。ここには特許流通アドバイザー・特許検索アドバイザーが常駐しています。特許の活用・利用や特許検索の効率的な利用法等について、相談・指導を行っています。これから先、特許戦略は企業にとって重要な武器とも言えます。

終わりに一言。昭和（戦後）の変革期は、大量生産と大量消費をキーワードに経済復興してきましたが、これから先の平成の変革期は、今失われてきた地域の個性を活かした新たな価値観をもって変革する時代であると思います。昭和初期に設立された地方公設試験場の設立の趣旨を今一度振り返ってみながら学び、平成の工技センターを目指したいと思っています。